



女のしんぶんかながわ

(は私・女の目・友愛を意味します)

2024年 5月

NO. 106

女性会議神奈川県本部
横浜市中区松影町2-7-21

TEL・FAX 045-662-8148

3.8 国際女性デー かながわの集い 2024

「女性と報道」それでも書く！
なかつたことにはできない」

柏尾 安希子

神奈川県新聞記者の柏尾さんは、個人のライフワークとして「慰安婦」問題などの歴史修正主義の問題や微用工問題などに関心をもち、取材をして記事を書いています。また、安倍政権以降、政治的に女性の権利をゆり戻そうというバックラッシュについても取材をしています。女性の人権に関して、日ごろの取材で感じていることを話していただきました。

女性がすべてを

負わねばならないのか

予期せぬ妊娠で孤立して出産し乳児を遺棄してしまうという事件が全国で後を絶ちませんが、同様の事件が2022年に横浜市でも2件あり、有罪判決が確定しています。いずれも刑法の死体遺棄という罪に問われての

判決ですが、予期せぬ妊娠をした女性だけが罰せられていることに、不条理を感じます。乳児の父親はこのような事実を知っているのだろうか、どう思っているのだろうか。いずれにしても、法的に何の責任も問われていません。このことに疑問を感じた神奈川県新聞の記者が実際に二人の女性を取材して、昨年9月「マイボデー・マイチョイス」という連載記事を書きました。そこには、孤立する中で誰にも相談できずに一人で出産せざるを得ない女性たちの状況、つらい思いやどうしようという女性の声と、裁判では男性については何も問われなかつたということが書かれています。

ベトナム人技能実習生のリンさんの事件は、帰国させられることを恐れて周囲に妊娠を隠したまま双子の赤ちゃんを死産し

ました。リンさんは遺体をタオルにくるみ、吊いの言葉添えて箱に入れて柵の上に安置しました。これに対して一審、二審とも有罪でしたが、最高裁は遺棄に当たらないとして無罪にしました。リンさんは最高裁判決の後に「刑罰ではなく苦しみを理解してあげてほしい。安心して出産できる環境に、保護される社会に変わってほしい」と、報道機関にコメントしました。この言葉は、胸に刻まなければならぬと思っています。

これらの事件で罪に問われるのは女性だけという疑問の声は少しずつ社会に広がり、そのような報道も増えています。女性記者だけではなく男性記者にも、そのような視点で報道してほしいと思っています。

広がる「女性嫌悪（ミンジンニ）」

今の日本、あるいは世界的にバックラッシュが激しくなってきましたが、私が取材している中でまさにバックラッシュと申す問題が、CoLabo（以下コラボ）パッシングです。コラボは、家で虐待されたり居場所が無かったりして家出を繰り返し、お金がないので性売買をせざるを得

ない状況に置かれた少女たちを支援する活動をしています。「バスカフェ」といってバスで温かい食事や衣服を用意して、少女たちとつながりを持ち相談に乗ったりします。おとしの夏ごろから、コラボが公金を不正受給しているというデマがネット上で広がり、それを見て現場のバスカフェで嫌がらせをする男性たちがいました。東京都はこうした現状に屈してコラボに委託していた若年被害女性等支援事業を昨年3月で打ち切りしました。

それまでコラボの女性支援事業は順調で評価もされており、コラボ代表の仁藤さんは国の審議会のメンバーにもなっていました。ネットでのそのパッシングは暇空茜（ひまそらあかね）を名乗る男の人が先導していましたが、コラボは彼を相手取って2022年11月に損害賠償請求を東京地裁にしています。暇アノン（暇空茜に迎合する人たち）が攻撃をしているアカウントを私は観察してきましたが、明らかに、その背景にはミンジンニが露骨に見えていました。元暇アノンだった男性二人にインタビューをしました。彼らは暇空茜の言うことがおかしいと

感じて仁藤さんに謝り、現在コロボの支援をしています。二人に共通していたのは、自分は女性を差別していないというのです。コロボの会計不正など暇空の「戯れ言」を信用していたと言っており、仲間との連帯感もあり「コロボ叩きは面白かった、娯楽だった」とも言っていました。結果の重大さに無頓着であり、女性支援を叩いてもいいという内面があるのかなという印象をいただきます。コロボが再開したときに、そこに来た18歳の女性に取材をしました。「いつも一人でご飯を食べているのでこの場がなかったときは、すぐくつらかった。再開されて救われる思いだし、いろいろな人が助かる」と言っていました。「暇空蒞」はネット上でのくだらない言説だという話でしたが、行政まで動かししていることを考えると、ネット上のくだらないと思われるミソジニ的の炎上でも、「戯れ言」として軽視して放置するとどこまでできてしまう社会なんだということ、メディアの方が肝に銘じなくてはならないと思います。この問題は、今後バックラッシュの問題として、メディアとしてまとめたいかねばと思っております。

萎縮する報道

日本の大きなタブーの一つに日本

軍「慰安婦」問題があると思います。政治が主導して正当化を図ってきている問題で、日本のメディアが正面から報道していないテーマです。去年は「慰安婦」問題について河野談話を発表してから30年という節目の年でした。この談話は、旧日本軍の「慰安婦」制度への関与と強制性を認め、今後の教訓として日本政府は歴史研究や教育にも取り組み検証していくと明言している文書です。

安倍政権になったとき談話見直しの機運が高まったのですが、逆にそのような機運について報道されたことで、韓国はもちろんオーストラリアなど海外から懸念の声が寄せられ、安倍氏も「この談話は引き継いでいきます」と言わざるを得ませんでした。今の日本のあり方はこの談話を引き合いに出し、国際公約としては軍の関与と強制性は認めているとされています。けれども国内では談話を否定する報道をするという、ダブルスタンダードの形になっています。河野談話発表以後、多くの市民や研究者が「慰安婦」問題にかかわる資料を発掘して政府に出していますが、政府がそれを「慰安婦」問題の関連資料として判断しているかどうか、わかりません。

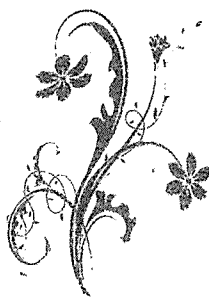
日本軍「慰安婦」問題は報道されないだけでなく、様々な面から排除されています。政府が歴史教科書か

ら、「慰安婦」「強制連行」という言葉を排除しているのは、大きな問題です。政府は、このような形で露骨に日本軍「慰安婦」問題について歴史修正を謀り、これにお墨付きを得た形で右派団体の動きが活発化しています。2018年「沈黙」立ち上がる慰安婦」のドキュメンタリー映画の上映会や2019年「表現の自由・その後」の「平和の少女像」に対して激しい攻撃がありました。また「平和の少女像」の海外設置について、日本政府は設置をしないよう強く申し入れをしています。2020年末に決定した安保3文書でも情報戦に重きを置くこと明記しています。外務省はホームページに「日本政府の認識と違う言説をみたら通報するように」といって、その窓口となるメールアドレスを載せています。

私が、なぜ慰安婦問題を書くのか。特に朝鮮半島の「慰安婦」については、植民地支配の問題がきつてもきりません。民族差別の問題や、根本的に女性差別の問題が複雑に絡まっています。これらの問題は、いまだに日本に影響を及ぼし続けています。植民地支配についてはいまだに総括できていないので、歴史修正主義が横行しています。また、女性問題については非常に軽んじられており、やっとな性的同意が日本の中に広がっ

てきていますが、まだまだ人の意識の隅々までいきわたっていないと思いません。日本軍「慰安婦」問題について、教科書からも言葉を排除して日本軍との関係を切ろうと政府がコントロールする中で、メディアが報道しなければ若い年代の人にとっては、それは無いことになってしまいます。そんなことは、許されません。日本軍「慰安婦」問題を報道しなければと思っている記者はいますが、書いても載せてもらえなかったり「もう解決しているだろう」と言われたり、記事が没になったというところも聞いています。報道機関が、自覚して報道していかねばならない問題だと思っております。

報告 飯島典子



思うこと

デイサービスと私

丹野貞子

デイサービスの窓から見える森の端が伐採された。残念だと思いう気が朝から続いている。

今、利用しているデイサービス利用を昨年秋に即断したのは、窓の外に小さいけれど森があったからだ。朝から夕方まで外を眺めていてもあきなかった。カラスが群れで森の上を旋回しているのも、電線に並んで止まっているのもおもしろい。

背景に森があり、マンションや戸建ての家が重なっているのを見ているのが楽しい。デイサービスの方から見られていると気付いているから、雨戸やカーテンをしつかり閉めているのだろうと、住民の気持ちを私は忖度している。

私がこのデイサービスを利用して3ヶ月になる。正直に言うところ初めは緊張したし抵抗もあった。が、今では楽しい。何故なら私はここでは責任を持つのは自分の体調だけで、それも、立ちあがっただけで、スタッフが出てきて身体を支えてくれるのだ。「大丈夫一人であるけるよ」と言い

つつも杖を使っている身では素直に手の支えを受け入れている。何故楽しい気分になれるのか。時間割で全員が動く以外は、自分のこと

に集中できるから。考えたり、書いたり、本を読んだり、窓の外をながめていたりできる。やりたくない家事をしなくてもいい。自分のことだけを考える時間があるのが嬉しい。87才になって、あとの人生でなにができるのかを考える時間があるのはほんとうに嬉しい。これまでの生き方をこれで良かったのか、まだやらなければならないことは残ってないかなど、できること、できないことを考えるのが楽しい。

デイサービスにしていると社会の中にいるという実感が持てる。昭和世代の中にいる、あの戦争体験をしている男と女がいる(じじとばばがいる)。それぞれ違う体験と違う人生を生きてきた、29名だが(男9名女20名)の中の独りなのがいい。

朝は入浴で忙しいが(スタッフ5名が入浴のケアをする)私は今のところ入浴なしで、本を読んだり、足のマッサージをしたりしている。

午後になるとトランプゲーム、将棋、カラオケ、等々それぞれに分か

れての自由時間になる。私はまだ他の人の名前を知らない。これからは少しずつ知る機会があるかもしれないと思っている。話しかけてくれる女性もいるが、私の方からも短い会話をするにしている。席替等も2週間ごとに行っているからルールがあるのだろう。

ふり返ると介護保険制度が施行する前に厚労省の課長から介護保険制度の必然をじっくり聞かされたことがある。

まさか施行3年で介護報酬を減額するとは思わなかった。しかも2度も減額になった。私はRAUで運営費を捻出できず法人に泣きついたことを覚えている。

以来介護報酬は値上げには必ず条件があり(介護量の増加等々)小規模な介護事業所は大きな壁に(人件費の昇給ができないので退職するスタッフが多く、新規採用しても人が集まらない)ぶつかってきた。RAUは国の融資八千万円を20年かけて返済してきたが完了した時にはRAUを廃業する決心をしていた。廃業後に年賀状等で「RAUでの経験を活かして介護職を続けています」との文字

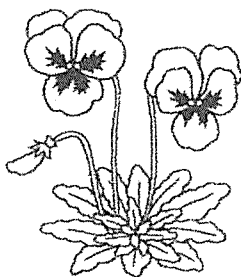
を読むと、私はよかったと思うのだ。しかし今年になってから国の予算案を見て愕然としている。介護保険施行以来、改正(3年ごと)に改悪されているのではないか。上野千

鶴子さんの女のしんぶんでの記事の発言通りだ。デイサービスの利用者が振り落とされることもありうるのだらうと考えてしまう。私自身は要支援2で負担割合は7月31日まで1割だが、全員2割にするのとことだ。2〜3年後に車いすの利用になることもありうるが、あと3年手術後の癌と変形性膝関節症をなだめつつ、どう生きていくのが私の課題だ。生きていく実感を味わうには目的を持つことだと思うのだ。

で、今は週1回デイサービスの利用を本気になって利用しようと思っている。

デイサービスの利用で、人間の老いの姿を前向きにとらえていくことができれば、私は生きる力を得ることができると思うのだ。

貞子がんばるぞ!



第31回

とっておきのステージ

皆様はじめまして。今年の「とっておきのステージ」に出演させて頂く『Epicé(エビス)』です。

各々がクラシックを演奏する音楽家として活動をする傍ら、2022年より「日常生活にスパイスを」をコンセプトにソプラノ・ヴァイオリン・ピアノのトリオで活動しています。

年始から地震や事故等、心騒がしい2024年。立春の雪が邪気払いとなり新たな清々しい一年になる事を祈りつつ、ご案内を寄稿いたします。

日々様々な事が起こり、情報が溢れる現代社会で、我々は音楽に耳を傾ける余白がないほどの大きな困難に出会うことがあります。しかしその時間は実は長くはなく、上り坂下り坂、また平坦な道を歩んでいる時の方がずっと長いので

はないでしょうか。日々の歩みの中に、ほんの少しの支え、共感、なぐさめ、そんな時間があれば人生はもっと穏やかに、豊かになるのではないかと。形のない音楽が寄り添えるのではないかと。声を大にせずとも、そっと寄り添える音楽を奏でる音楽家でありたい。そう私達は願います。

昨年、表舞台からの引退を表明した指揮者バレンボイムは音楽の愉しみ方についてこう語っています。「音楽は感情に訴えかけ、普段体験出来ない事でも可能にしてくれる。数秒の沈黙から始まり、曲が始まったら最初の音を捕まえるんだ、そして一緒に音楽の世界に飛び立つんだ、最後の音まで。そうすれば多くの喜びが得られるだろう。それはとてもユニークなもので、世界にも人生にも、この種の喜びを自分に与えられる物はない。」

ホールに足を運び、携帯電話の通知や仕事の進捗にとらわれず、ただ音楽の中に在る時間をご一緒に愉しませませんか。『Epicé』が贈るスパイスで皆様の日常に新鮮な彩りを！

《プログラム》

前半【作曲家が作品を通して伝えたいこと】

楽器の響きをじっくりお聴きください。ベートーヴェンのピアノソナタ第14番「月光」、ブラームスのヴァイオリンソナタ第1番「雨の歌」他、ソプラノ・ヴァイオリン・ピアノそれぞれの音の魅力をお届けします。

後半【私たちが音楽を通して伝えたいこと】

馴染み深い日本の曲や東欧チェコの作品を解説と共にお届けします。その中から、当公演の為に作曲家の梅野絵里氏に編曲を依頼した子守歌「ヴィーガラ」についてご紹介いたします。作曲家のイルゼ・ウエーバーは1903生まれのユダヤ人女性。夫、息子と共に、ナチスが子供達や芸術家を集めたゲットー、テレジンシユタット強制収容所に暮らしました。子供達の夜間看護師として働き、病気であっても薬を処方されない子供達のため、ギターを持ち自作の曲を歌って聞かせました。その後、家族と

共にアウシュビッツに送られ、イルゼと息子はガス室で亡くなっています。

音楽家として、母として、我々が伝えるべきメッセージ。

悲しくも、美しく優しい詩と音楽に、平和への心からの祈りを込めてお届けします。

ぜひ皆様にお運び頂けますよう、お待ちしております。

《仏『Epicé』：スパイスのこと》
エビスの情報はSNSでもご覧いただけます。

女のしんぶん

女性のための、女性の手による新聞を購読しませんか

発行：月2回（10日・25日）

購読料：月400円（送料別）

申し込み先：女性会議神奈川県本部

TEL&FAX 045-662-8148